様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３４２０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０７４１

研究課題名（和文）「スポーツ原体験」がスポーツに対する価値観や態度形成に及ぼす影響

研究課題名（英文）The influence of a proto-experience in sport toward value and attitude formation in sports.

研究代表者
奥田　愛子（Okuda, Aiko）

びわこ学院大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：７０５５６０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では「スポーツ原体験」がその後のスポーツに対する価値観や態度の形成にどのような影響を及ぼしているかについて検討した。まず、わが国のトップアスリートの自伝本の分析では、彼らの原風景は運動要素を含み、後年の競技への取り組みやアスリートとしての特徴との重なりがみられ、競技への個性的な取り組みを通した個性化（生き方）へのつながりが窺われた。続く競技力やセカンドキャリアが異なる一卵性双生児アスリートの事例では、原風景やスポーツ原体験、重要な他者の影響や進路決定時における双生児間の関わり等から両者の歩みを視覚化し検討したところ、両者の差異の背景には自伝的記憶への意味づけの違いの影響が考えられた。

研究成果の概要（英文）：This reserch involves the influence of a proto-experience in sport toward value and attitude formation in sports.In the analysis of the “proto-scenery” embedded in the narratives of the published autobiographies of selected top Japanese athletes, the proto-sceneries of top-athletes typically involved the element of active movement, and there is an overlap between the style of athletic competition and the characteristics of the athletic mentality on the image level. It can be said that proto-sceneries influenced subsequent behavior in the athletes as can be seen through a relation with their present athletic style. In succession on monozygotic twins study, similarities and differences in the twins' life courses as identified from the accumulated data were then mapped in a tree diagram, creating a visual representation. This revealed different narratives of their proto-experiences in sport.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：スポーツ原体験　原風景　アスリート　語り　個性化

１．研究開始当初の背景

人生早期の運動・スポーツ経験がその後に及ぼす影響については、しばしば言われている事ではあるが、それを確かめた実証的研究は少ないようである。本研究者は、原体験および原風景に関する先行研究を参考に、スポーツ事象に限定したスポーツ原体験の体験様式についてこれまで検討した（平成 22～24 年度科学研究費補助金、「スポーツ原体験とパーソナリティ発達に関する研究」）。その結果、スポーツ原体験を体験の連続性の程度や現在との意味づけを基準に、事実説明タイプ・体験回想タイプ・行為記述タイプ・評価意味づけタイプ・説明演説タイプの５つのタイプを抽出した（奥田、2010）。

表１　スポーツ原体験の各タイプの定義と記述特徴

スポーツ原体験のタイプ	定義	記述特徴
事実説明タイプ	過去の一場面の想起にとどまり、過去から現在までの体験のつながりが希薄である。	場所や出来事など、事実としての情報を伝えるために記述する。感情や評価が入っていない。「～だった」といった単純過去形を多用する。
体験回想タイプ	現在の評価や意味づけは弱いものの、過去から現在までの体験の連続性がみられる。	場所や出来事など、事実としての情報を伝えるために説明しながら、当時の自分自身が見て感じたことを回想しているように記述する。文の最後は過去形になるが、文中は「なる、ある、する」のような表現が多い。
行為記述タイプ	過去の強烈な体験を持ちながら、それが現在においてその意味づけが未だなされていない。	事実として行ったことの説明である が、今ここでの行為のように記述する。現在形や直接話法を用いて、特定の場所での出来事・行為について順番どおり詳細に述べる。
評価意味づけタイプ	原体験を始点とした個々の体験の連続性が強い。	自分が直接体験したことを説明しな がら、自分なりの評価・感想・意味づけを行い、整理して記述する。過去の体験を現在の概念や価値観で説明する。「考える・思う・感じる」といった現在形の評価が多い。
説明演説タイプ	原体験を始点とした個々の体験の強い連続性がみられるものの、それらは極めて個人的な評価や意味づけにとらわれている。	過去の体験を語り、それを評価しつつ、現在の状況やスポーツ領域一般についての自分の考え方を説明する。外的な客観的基準はなく、自分の価値観での記述が見られる。「～すべき」や「～なるべき」の表現が多い。演説・講義調の主張が多い。

そして、スポーツ原体験は性差や競技レベル、種目特性などの要因の影響が認められた。特に、競技レベルの高い者は、「評価意味づけタイプ」「体験回想タイプ」のスポーツ原体験を語る頻度が高かった。このような結果より、子ども時代からのスポーツ活動におけるさまざまな体験の連続性についての自覚が、現在の彼らの競技継続の支えとなっていることが示唆された（奥田、2012）。これまでスポーツ原体験については、ごく少数ながら教育学的な観点からの検討がなされてきてはいるものの、スポーツ領域における原体験の研究は国内外においては今のところ見当たらない。そこで、スポーツ原体験の体験様式について、より詳細に検討するために、オリンピック選手や一卵性双生児のスポーツ選手を対象に調査を行った。その結果、子ども時代に同じようなスポーツ体験、あるいは生育環境が同一であっても、各個人でまったく異なるスポーツ原体験が語られ、その後のスポーツ活動の意味づけ、つまり、競技力向上や実力発揮（現実適応）の様式および内的成熟（個性化）の過程も異なっていることを報告した（Okuda, et.al.2010）。このことから、スポーツ原体験の体験様式をより詳細に検討するためには、個別事例の質的分析の有効性および必要性が考えられた。

このように、本研究者はスポーツ原体験の体験様式について、ある程度は明らかにしてきたが、本来、スポーツ原体験研究の目指すところは、スポーツ原体験がその後のスポーツに対する価値観や態度の形成にどのような影響を及ぼすのかを確かめることにある。つまり、スポーツ原体験はその分類基準にもあるように、スポーツ原体験を始点としたその後のスポーツ活動における体験の連続性の程度や、現在への意味づけに焦点をあてている。現在に生きる語り手が、過去のスポーツ原体験をどのように受けとめ、語るかは、現在から過去とのつながりを意味づけようとすることでもあると考えられる。同時に、そのような意味づけの様式は、現在のスポーツに対する価値観や態度を反映するものとなる。このようなことから、スポーツ原体験の体験様式のその後のスポーツに対する価値観や態度の形成への影響について検討することが新たな課題として提起された。

２．研究の目的

本研究では、スポーツ原体験の体験様式において、その体験の連続性や意味づけが、その後のスポーツに対する価値観や態度の形成にどのような影響を及ぼしているかについて明らかにしようとするものである。なお、「スポーツ原体験」とは「スポーツ参加に関連する全ての事象における子ども時代の最も印象的で、かつ重要な意味合いを有すると個人が判断する体験」と定義する。

子ども時代のスポーツ参加のあり方が、その後のスポーツに対する価値観や態度の形成に影響を及ぼすならば、子ども時代における望ましいスポーツ参加あるいは体験様式について言及できるのではないかと考える。昨今、「体験学習」や「自然体験」の意義が強く叫ばれるほどには、それらの後年に及ぼす影響の機序に十分な説明がなされていない現状が認められるなか、本研究が早期の身体経験の役割についても示唆を与えるはずである。またそれは同時に、安易な「体験重視」の考え方にも注意を喚起できるものと考える。

３．研究の方法

スポーツへの高強度な関わりをもつ元オ

リンピック選手や、遺伝子や生育環境が近似する一卵性双生児アスリート等を対象者として、スポーツ原体験および幼少期からのスポーツ活動についての面接調査を行い、スポーツ原体験の影響についてさらに分析・検討を加える。特に前者では、競技スポーツへの高いコミットメントや彼らの個性化との繋がりについて、そして後者では、語られるスポーツ原体験の内容とその後のスポーツへの関与における双生児間の異同による比較を通して、スポーツ原体験の影響を特定化していく。なお、本研究では、子ども時代の印象的なスポーツ経験（スポーツ原体験）がその後のスポーツに対する価値観や態度にどのような影響を及ぼすのかについて、ナラティブアプローチを用いて明らかにするものである。そのため、調査対象者には、あらかじめ設定したインタビューガイドにそった半構造化面接を行う。

４．研究成果

１）わが国のトップアスリートたちが著した自伝本を分析資料として、その中から彼らの原風景を読み取り、その特徴、および、その後の競技スポーツとの関わりにおける意味を検討することを目的とした。「成人してからも心の中に深く刻み込まれ、人生に影響を与え続ける幼少期の風景であり、それは現在を生きる自己との相互作用を通して心のなかに創造された風景である」(Nakagomi ら、2011)という原風景の定義づけのもとに、自伝本から関連エピソードや語りを抽出し、①原風景と思われるエピソード、その時期（就学前・就学後・中学生頃）および場所、②原風景に伴った感情ならびに関わった人物、③原風景における身体活動の有無、④原風景の現時点での考え方、行為、人格等への影響、⑤現時点での原風景への意味づけならびに評価、⑥遊びや運動に限定した早期体験の「空間」特徴の６つの観点から分析した。その結果、原風景として取り上げたエピソードの全てが小学校年代までであり、彼らの原風景の形成は極めて早期であった。また、彼らの原風景は運動要素を含み、後年の競技への取り組みや、アスリートとしての特徴とイメージレベルでの重なりがみられた。さらに、その後の競技活動に対する原風景の影響についても現在の競技姿勢との意味づけをはかる傾向がみられ、それらは競技への個性的な取り組みを通した個性化（生き方）へのつながりが窺われた（図１）。

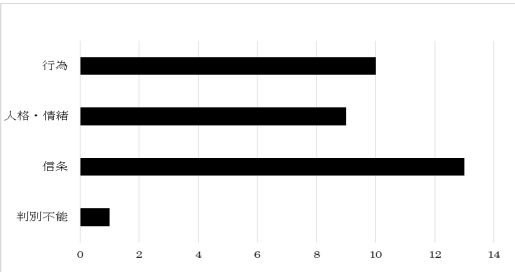

図１．原風景の意味

そして、遊びや運動に限定した早期体験の「空間」については、自然空間の遊びや自然物遊び、そしてスポーツが圧倒的に多く、豊富な自然遊びと同時に組織的なスポーツへの参加が早期から認められ、それらは「スポーツ原体験」ともなっていた。

２）遺伝的側面や成育環境が近似しながらも、後年の競技への態度や意欲に差が生じたり、きょうだいの一方が競技スポーツから離れるなど異なる歩みを選択した一卵性双生児アスリートの２事例について検討した結果を報告する(図１・2)。原風景やスポーツ原体験などの自伝的記憶の意味づけの語りにおける相違が、発達過程での競技への態度や意欲の差異をもたらし、そこには非共有環境要因の影響が推測された。また、幼少期からの体験の連続性の程度が鍵となることが確認され、力動性の高い運動要素を含む原風景が認められた。さらに、スポーツ原体験においては、後年の相対的に高い競技水準への到達につながるようなエピソード（早期体験における敗北を通した“悔しさ”につながるエピソード）を語った。幼少期から長じるまで、同じ競技を同じ環境で継続する一卵性双生児であっても、原風景やスポーツ原体験などの自伝的記憶の意味づけの相違が、競技への態度や意欲の相違と重なり、２人の異なる歩みを生み出す背景となったものと考えられる。言い換えれば、遺伝的側面や成育環境が類似していても、各々がそれらをどのように意味づけるかが、その後の歩みに大きく影響すると言える。そして、同時にそれは、幼少期からのスポーツ活動における心理的な体験過程の重要性を意味するものといえる。

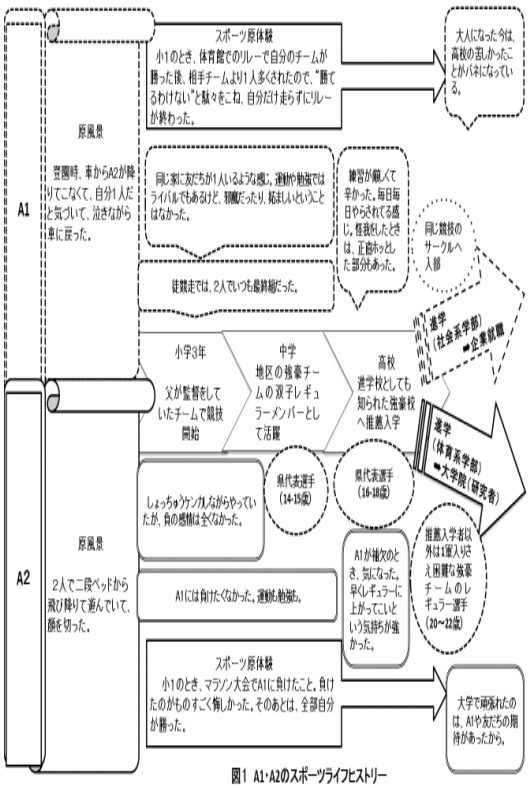

図1 A1・A2のスポーツライフヒストリー

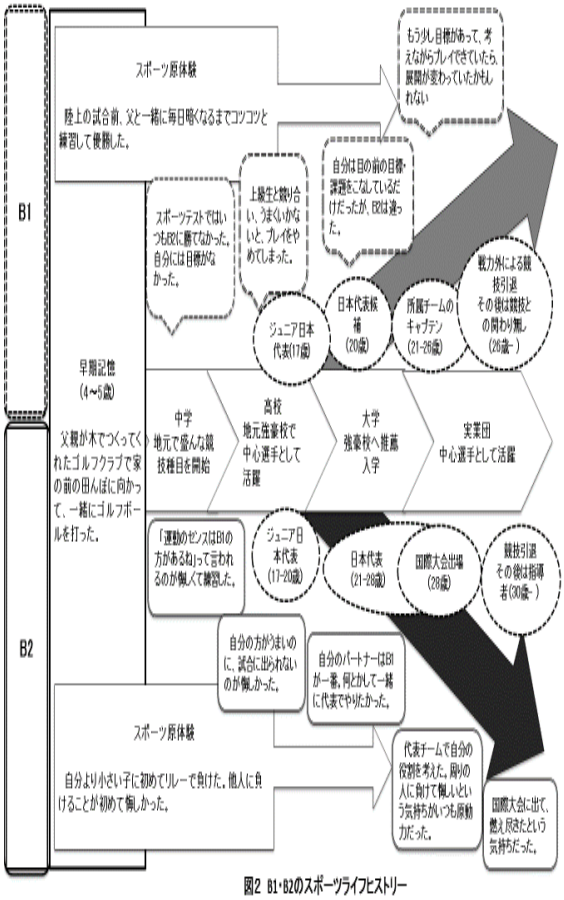

図2 B1・B2のスポーツライフヒストリー

今後は双生児アスリートを対象とした自伝的記憶と後年の競技活動との繋がりをより明確にするために、さらに事例を重ねていき、彼らが成育過程において両親を中心とした他者を含め、自伝的記憶をどのように受けとめていったのか、後年の競技行動との連続性を詳細に検討する必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①奥田愛子、中込四郎、後年の競技への態度や意欲における自伝的記憶の連続性、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要、査読無、7 巻、2016、89-97.

②奥田愛子、中込四郎、鈴木敦、トップアスリートの自伝から「原風景」を読む、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要、査読無、6 巻、2015、69-75.

③奥田愛子、中込四郎、アスリートのスポーツ原体験の特徴、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要、5 巻、2014、79-84.

〔学会発表〕（計５件）

①奥田愛子、中込四郎、自伝的記憶の後年の競技に対する態度や意欲の連続性～一卵性双生児アスリートの事例～、日本スポーツ心理学会第 42 回大会、2015、九州共立大学(福岡).

②Aiko Okuda、Shiro Nakagomi、Genetics and environment in the developmental history of top athletes: A comparative analysis based on autobiographical memories of monozygotic twin athletes.14th European Congress of Sport Psychology.2015、ベルン大学(スイス).

③奥田愛子、中込四郎、４つ子アスリートの原風景ならびにスポーツ原体験、日本体育学会第 65 回大会、2014、岩手大学(岩手).

④Aiko Okuda、Shiro Nakagomi、 The role of childhood experiences on subsequent involvement in high-level competitive sports: Considering the proto-scenery and proto-experiences in sports of twin athletes. 7th ASPASP international congress of sport psychology.2014、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京).

⑤Aiko Okuda、Shiro Nakagomi、Effects of proto-experiences related to sports on later sport performance.-Case study on monozygotic twins. The ISSP 13th World Congress of Sports Psychology.2013、北京体育大学(中国).

〔図書〕（計２件）

①奥田愛子、中込四郎、運動遊びと情動体験、中込四郎・西野仁雄編、情動と運動～スポーツとこころ～、朝倉書店、2016、56-72.

②奥田愛子、中込四郎、原風景から見た幼少期の身体経験のもつ意味、澤江幸則、木塚麻博、中込四郎編著、身体性コンピテンスと未来の子どもの育ち、明石書店、2014、90-116.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

奥田愛子（OKUDA AIKO）
びわこ学院大学　教育福祉学部・准教授
研究者番号：70556000